

“ハコ”を活かして！

2月7日(木)15:30~17:30 センター棟 101号室

[講師] 鈴木基規 ((公財) 静岡県文化財団 事務局長兼総務課長)
長谷川亜樹 (サントリーホール企画制作部 副部長/プログラミング・ディレクター)
[モデレーター] 田村孝子 ((公社) 全国公立文化施設協会 副会長)

○田村氏 大変お待たせいたしました。

ハコを活かしてということで、これからしばらくの間、皆様楽しんでいただけたらと思って始めさせていただきます。

今日はお二人にいらしていただきました。皆様もよくお聞きになる言葉に、文化による地域づくりと、文化による地域づくり課という課がある自治体もあるということはこの間、知りましたけれど、そう言われて全国に2,200の公立の文化施設があると言われていています。でも残念ながら、図書館に司書がいるように、それから美術館や博物館に学芸員がいるように、国家資格がある専門家が、職員というものがまだ存在しないのが劇場・音楽堂なのですが、6年前にやっと劇場法という法律ができました。そして今、各地の公共文化施設がさまざまな試みを始めていらっしゃいます。

今日もですね、無料でどんなことがされているのだろうと、興味をお持ちでいらした方がたくさんいらっしゃると思うのですが、完全無料で終日施設を開放しているという、2つの取り組みについてご紹介したいと思います。

サントリーホールは皆様多分ご存じだと思いますが、音楽専門ホールです。桜の季節に、オープンハウス～サントリーで遊ぼう！という催しを大ホールと小ホールとロビー周りなどを開放し、11時から5時まで無料コンサート等を行っているというものです。

それから、もう一つは静岡のグランシップ、県立の劇場です。2006年から地域のボランティアの発案で子どものためのさまざまな遊び場を提供しているというものです。今ではホール全館といっても、会議室などは使っていないようですよございますけれど、地域の名物になりまして、小さいころに来たお子さんがまた訪れるというようなこともあるようですよございます。

皆様のホールを活かすために、紹介しようと思いましたが、公共のホールの職員の方、ちょっと手を挙げていただけますか。大部分そうですね。ホールに関係のないという方、勉強をしているとか、そういう方はどのぐらいいらっしゃいますか。それから地方自治体の職員の方、でも大部分が今日はやはりホールの方が多いようですよございますけれど、ホールを活かすために、芸術団体やボランティアの方、ホール職員の知識と情熱と長年の努力というものが多分必要かと思えます。お二人のお話の中から何かヒントをみつけていただければと思ひまして、今日お二方にいらしていただきまし

た。

左から静岡県文化財団の事務局長であり、総務課長である鈴木基規さんです。

○鈴木氏 鈴木です。よろしくお願いします。

○田村氏 それから、サントリーホール企画制作部の副部長であり、プログラミング・ディレクターである長谷川亜樹さんです。

○長谷川氏 サントリーホールの長谷川亜樹と申します。本日はよろしくお願いいたします。

○田村氏 お話を伺えば、おわかりだと思えますが、多分対照的なホールの2つで、皆様がどんなところに興味をお持ちになるか、お聞きになってみていただきたいと思えます。

では、まず、サントリーホールは皆様知っていらっしゃいますか。静岡のグランシップは知っていらっしゃいますか。それは余り皆様ご存じないですね。まずですね、どこにあるどんなホールなのかということをご紹介していただき、どんなことをやっていたらいいかということ、まずお二方からご紹介していただきたいと思えます。

では、長谷川さんからサントリーホールをご紹介くださいませ。

○長谷川氏 改めまして、サントリーホールの長谷川亜樹と申します。よろしくお願いいたします。

お配りしているレジュメは、こちらのスクリーンの文字情報を抜き出しているものとなります。画像や映像などは、こちらのスクリーンをご注目いただければと思えます。

今ご覧いただいているこの写真は、これからご紹介する春の無料イベント、オープンハウスの1コマです。私自身、とても気に入っている写真なんですけれども、皆様のイメージされるサントリーホールとは、もしかしたらかなりほど遠い画像になっているのではないのでしょうか。

ちなみに、サントリーホールにいらしてくださったことのある方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。半分弱ぐらいでしょうか。まずは、サントリーホールについて簡単にご説明をさせていただきます。

サントリーホールは、1986年の秋に、東京初のコンサート専用ホールとしてオープンいたしました。住所でいいますと、東京都港区赤坂というエリアになります。森ビル株式会社が開発した複合施設、赤坂アークヒルズの中に立地しています。このエリアは東京の中でも、もうビジネス街になっていまして、すぐそばは六本木通りという大きな通りがあつて、その上は首都高速が走っているようなところなんですけれども、ホールの入り口は通りからは1つ上のフロアにありまして、この写真にありますとおり広場に面していますので、意外と入り口は静かな環境となっています。

また、実はあまり知られていないことなんです、ホールの屋上は通常非公開の庭園となっております。

ホールは2つございまして、2,006席の大ホールと400席程度のブルーローズ（小ホール）がござ

います。大ホールのほうは、世界一美しい響きを設計のコンセプトとしておりまして、客席がブドウ畑のように段々となって、舞台を360度ぐるりと取り囲む日本で初めてのヴィンヤード形式というものを採用しています。20世紀の世界的な指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンさんのアドバイスでこういう形を採用いたしました。こうしてカラヤンさんとゆかりがあるホールということで、このホールの手前の広場は、アーク・カラヤン広場と呼ばれるようになっております。

また、大ホールの舞台の正面には、オーストリアのリーガー社という工房でつくられました世界最大級のオルガンがございます。

一方、ブルーローズのほうは、リサイタルや室内楽向けで、舞台が完全に平土間、フラットになるホールでして、椅子も可動式、動かせるようになっていますので、この写真は縦に使った写真なんですけれども、これ以外にも横使いで舞台を自由にレイアウトできるようになっています。

では、なぜサントリーという民間企業がホールをつくることになったのかということですが、もともと今から50年前、1969年に今のサントリー芸術財団の前身であります鳥井音楽財団というのをサントリーが設立しておりました。また、1983年には、今も続いております大阪で開催している「1万人の第九」というイベントをやるなど、ホールができる以前から日本の音楽文化の発展にサントリーという会社が微力ながら貢献してまいりました。その根底にあったのは、創業者の鳥井信治郎の信念、利益三分主義と呼ばれるものです。つまり、事業によって得た利益は、事業への再投資や顧客サービスだけではなく、社会貢献するべきだという考え方でして、その精神を二代目社長であった佐治敬三が受け継ぎ、周囲の期待に応える形で、東京で初のコンサート専用ホールの建設を決めたということでございます。

それから、サントリーホールがオープン時に画期的だったことというのは、おもてなしのサービスというのを導入したことです。生活文化企業というふうにならなっているんですけども、コンサートを楽しむ文化を日本に根づかせたいという思いから、例えば日本で初めて導入したものがお客様を案内するレセプションです。それからお酒の会社ですので、お酒が飲めるバーコーナーというのも日本で初めて設置いたしました。

そして、今ではお客様に愛されるホールに育ちまして、年間では大小の2つのホールを合わせて550公演、来場者としては60万人規模のお客様にご来場いただいております。

次に、主催事業の特徴について簡単にご説明いたします。

一つ挙げられるのが、グローバルな視野でオリジナルの企画を多数展開しているということです。では、オリジナルな企画というのはどういうことなのか、我々は「サントリーホールだからできること。サントリーホールにしかできないこと」というのを常々考えて、企画をしてまいりました。例えば「ホール・オペラ」というのは1993年から始めたものですが、劇場ではないコンサートホー

ルならではの音響空間を生かしたオペラとして2010年までやっておりました。今は休止しているんですけども、そこに集まった世界的な歌手が日本の若手歌手に指導してくれるオペラ・アカデミーというものこの企画から立ち上がりました。

また、1999年からは、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団をサントリーが直接招聘するようになりました。それによってオーケストラ公演、来日公演だけではなくて、さまざまな併催企画を行うようになっております。例えば無料の公開リハーサル、それから首席奏者によるマスタークラス、そして中学生・高校生のための鑑賞教室、こういったこともウィーン・フィルと一緒にやっております。さらに、2012年には東日本大震災の復興支援として「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」というのをマッチング・ファンドとして設立し、今もさまざまな活動を行っております。

また、スペシャルステージという、世界的なアーティストが例えばソロ・リサイタルや室内楽、オーケストラとの共演など多面的に展開するプログラムですとか、国際作曲委嘱シリーズ、つまり世界的な作曲家に新作を委嘱するということを開館時からずっと行っております。

その他は、お配りしております2019年度のラインナップのチラシで後ほどご覧いただければと思います。

ポイントといたしましては、こうして世界的なアーティストや作曲家と長年にわたって信頼関係を築いてきたこと、それによってそのアーティストとの対話からまた新たな企画が生まれているということでございます。

もう一つの柱としてお伝えしたいことが、私たちが「ENJOY! MUSIC プログラム」と呼んでいるものです。いわゆる教育普及の企画なんですけれども、このプログラムに当たっての指針となっている言葉がございます。こちら（スライド）にも出している通り、作曲家の芥川也寸志さんがホールのオープン時に残してくださった言葉です。「よきホールは、そこに、よき音楽を育て、よき音楽家たちを育て、そして、そのまわりに、よき聴衆を育てる」こういった言葉をいただいたことで、私たちは今3つの柱を立てて、教育普及活動を行っております。

まず、柱の一つ目は「音楽に出会うよろこびを ～未来を担うこどもたちへ」とし、未就学の3歳から、上は高校生まで、子供の対象年齢に応じたさまざまなプログラムを行っております。

2本目の柱には「音楽を創るよろこびを ～若きプロフェッショナルたちへ」とありますが、こちらはアマチュアの音楽愛好家を育てるというのではなく、将来、日本の音楽界をリードするプロフェッショナルを育てたいという思いで行っております。活動内容としては、先ほど申し上げたオペラ・アカデミーのほかに、室内楽アカデミーを加えた2つのアカデミーを開講しております。また、先ほど申し上げたウィーン・フィルのマスタークラスもあります。「レインボウ21」というのは、首都圏の音楽大学の学生さんにアートマネジメント、企画制作の現地体験の機会を提供すると

いうものです。来年度は休止になっておりますけれども、これも長年続けております。

そして、3つ目の柱が「より開かれたホールをめざして」です。こちらはあらゆる方々にアクセス可能なホールであるための取り組みで、公演としては2本ございまして、月に1回、お昼間に無料で開催しております「オルガン プロムナード コンサート」、そしてもう一つが今日後ほどご紹介します「オープンハウス ～サントリーホールで遊ぼう！」となっております。

サントリーホールの紹介は以上になります。

○田村氏 ありがとうございます。

オープンハウスについては、この後、じっくりお話しいただくことにいたしまして、それでは、今度、静岡のグランシップについて鈴木さん、お願いいたします。

○鈴木氏 改めまして、静岡県文化財団事務局長兼総務課長の鈴木です。

まず、最初に、静岡県文化財団はどういうものかなということを説明いたします。

お手元のアニュアルレポート28ページをご覧ください。文化財団とグランシップの沿革ですが、文化財団は昭和59年1984年に静岡県と県内の市町村から10億円の出捐を得て設立されました。

具体的にどんなことを目的としていたかということ、最初の趣旨書に書かれているのは、個性豊かな県民文化の振興を目的ということで、文化振興を図っていきましょうということで作られた財団です。

59年5月に書かれているように、4つの柱、文化鑑賞の提供、地域文化の振興、文化意識の啓発、文化情報の提供という事業をグランシップができるまで、20年近くやってきました。

平成に入りましてからちょうどバブルの時期ですね。国鉄が解体されて、その後国鉄の借金をどうするかということで、国鉄が所有していた土地を地方自治体がいちいち買取ってというようなことで、これは全国至るところでやられていたと思いますが、静岡も静岡の駅のちょっと東側の東京に近いほうの広大な貨物ヤードの跡地を静岡市と静岡県が買い取りました。それで、その後に何をつくるかということで、有識者の方々に検討していただいて、県民国際プラザ、のちのグランシップをつくりましょうというようなことが計画されました。

そして、でき上がったのが平成10年の夏、9月、秋から仮オープンしました。それで正式オープンは3月13日という形になっております。場所は、東静岡駅というのを作りまして、その南口の隣接地です。今年で20周年になります。東京から大阪へ向かって行って静岡の駅のちょっと手前に大きな船をちょうどひっくり返したような大きな建物がありますが、これがグランシップです。規模はどのぐらいかということ、東西200メートル、南北80メートル、高さ60メートルです。地下2階、地上12階ということで、延べ床面積6万平米ですから、相当大きいですね。

そして、施設の概要ですが、大ホール4,600、中ホール1,200、そして、会議ホール500、交流ホ

ール、展示ギャラリー大小の会議室。それとあともう一つ、これ今日はここ触れないですけど、皆さんご存じかと思えますけど、SPACという静岡県舞台芸術センターという演劇の団体が実はこのグランシップの中に入っております。ただ、SPACはここグランシップを拠点に活動していますが、ここだけではなくて、静岡日本平にも芸術公園という活動場所を持っています。今日のグランシップはこの芸術劇場、これを除いた部分のお話ということでご理解いただければありがたいかなと思います。

それで、指定管理の話ですが、先ほど平成11年にグランシップができましたよと。できたと同時に、文化財団は、ここの管理運営を任されてきました。そして平成18年に静岡県はグランシップの運営について指定管理者制度を導入しました。文化財団が単独指名され、今日に至るまで、指定管理者としてここの管理運営を任されております。

それちょっと余談ですけども、グランシップはあくまでも愛称です。正式名称は静岡県コンベンションアーツセンター、だからコンベンションの機能とですね、アーツセンター、文化ホールの機能、これを両方持ち合わせた施設として静岡県はつくっております。ですから、実は静岡県民の方々からですね、グランシップってどういうところかと思われているかという、どちらかという、コンベンション施設という色彩を強く感じているようです。

この後、「はじめての劇場」という言葉を出すつもりでいるんですけども、コンサートとか、劇場としての機能があるところという理解は、実はなかったです。私も平成18年に県から派遣されて、出向していったんですけども、そのときまではグランシップでどういうことが行われているか、ただ単に会議を行う場所ぐらいの認識しかありませんでした。県の職員でありながら、そういう状態でした。ですから、このグランシップってどういう理解をされているかという、コンベンション施設という、県民の方々、何とか大会であるとか、または静岡ですとお茶が有名ですので、世界的な規模でのお茶まつりをやったりとか、そういうときに皆さん来たりとか、どうしてもそういうイメージが強くて、コンサートをやったりとかがやられているというような意識は余りなかったです。

それでは事業ですが、企画事業を年間60本やらせていただいています。柱としては、現在、第4期の指定管理者の柱としてはここの1から5まで挙げています。鑑賞、県民参加、教育普及、アウトリーチ、こういう言葉を使っています。その前の第3期では、実はここの言葉は「はじめての劇場」、「つながる劇場」、「開かれた劇場」と、このグランシップを「劇場」としていかに理解していただくか、を柱にしたんです。しかし、やはりそれはわかりにくいという話になりまして、もう一度、こういう言葉に戻して、目的がわかるよう、どういう県民参加をしてもらうか、誰もが参加できると、そういう言葉を入れさせていただいて、今4本の柱でやっています。

それとあともう一つは、新たなグランシップのファン獲得のための取り組みと、これはまた後で詳しく説明させていただきます。

それで、どんな建物かというと、富士山がかいま見えるような形で、非常にシチュエーション的にはいい、きれいな風景となっております。ここの前の緑のところは、グランシップ広場ということで、ここも実は貸し出しをしているところです。ふだんは一般の方が自由に使えるような場所になっていますけれども、有料でお貸しもしているということになっています。

これが南東、東側から見たところですが、ちょうど船をひっくり返したような状態に見えると思いますけれども、先ほどちょっとお話をしたSPACの芸術劇場があります。中はどうなっているかということで、大ホールは、4,600人が入るホールです。この写真は、音楽広場ということで、ここアリーナ部分になっているんですが、このアリーナ部分が1,700平米ありますので、このセンターに指揮者、マエストロが立ちまして、この周りに300人のオーケストラ、これほとんどがアマチュアです。プロの方も何人か入っていただいています。それで、こちらの部分が400人の合唱団、周りに100人程度の子どもたちを中心としたダンスということで、まず出演者は700人から800人ぐらいの催事です。そしてここ最近はずっとチケットも2,200席強出ております。3,000人でつくる音楽の祭典ということで、非常に人気のあるものになっています。

ここは貸館では例えば4,000人が入る大会をやったりとかですね、または商品の見本市と、いろいろなことを取り組んでいますけれども、こういうような形の使い方もしています。

こちらは中ホールです。講演の場合、1,200人入ります。ただ、コンサートとか何か、シアター形式ですと約900人弱のものになります。そしてここは、最初の計画は演劇をやるホールとして設計されています。ただし、SPACが芸術劇場で演劇をやっていますので、こちらのほうはどちらかというと音楽を中心に使っています。音の響き等についても、相当工夫させていただいて、改善されております。

そして、伝統芸能、能楽ですけども、仮設舞台をつくってこういう形でやっております。ただし、普段ここに松葉の壁があって、通常普通の能舞台と同じような形でやっているんですが、今回この静岡能、鉄輪では、これ宝生流の家元にやっていただいたんですが、家元がぜひ能をおもしろくやっていこうということで、後ろが滝の映像になっています。千頭山の映像ですけど、滝の映像を移して、ここは松葉の普通絵ですけども、本物の松を生けてという形で実施しました。能のときには700前後の人が入るようなものになっております。ただ、これをやっているからそれだけ人が入っているというんじゃなくて、教育普及ということで、いろんな形で県民の方々に能の体験をしていただいたり、子どものうちから能を体験していただくというようなことで、仕掛けをいろいろやってきた結果として700人入るような形に今なっております。

それで、あとそれ以外に会議ホールとか、交流ホール、ここでもコンサートをやったりいろいろしています。展示ギャラリー、一番大きなところが20メートル四方ですけども、もう一つ両サイドに小さなホールと3つのギャラリーがあります。ということで、こういうような形でコンベンションもできる、文化ホールとしても使えるというような形のものになっております。

それではグランシップの企画事業をもう少し説明します。

グランシップはどういうことを意識しているかということですね、先ほども見ていただいたように、グランシップって多目的な施設です。これをマイナスと見るのか、プラスと見るのか、そこは我々は多目的だから何も専門的なものはできないよねではなくて、多目的の良さを活用していこうと考えています。

もう一つは、県域、静岡県にはこういう文化ホールが県立のホールはグランシップしかありませんので、県域をカバーするのはどういうことかをずっと意識してきました。あともう一つは、県民の皆さんに、文化に触れていただきたいということは考えていますけど、子どものうちから、文化芸術に触れていただく、そこを最重点にやっっていこうと考えています。そこで、市町のモデルとなるようなことも意識したりしながら、先駆性、広域性、補完性、独自性を意識しながら取り組んでいます。

なお、新たなグランシップファンの獲得のために、子どもが来れるような仕組みをつくりましようということで、まず子ども・学生チケット、これは1,000円、一律。大人が1万円払うものでも1,000円です。2,000円のものも何でも1,000円です。それで、これは購入時に席を選べる。例えば親子で観たいよといったときに、席を設けてしまうと親子が分かれてしまいますよね。それはどうなんでしょう。せっかく一緒に来ているのだから、一緒にそこで感動を味わってもらったほうがいいんじゃないか、そばで。ということで、隣の席で座れるような形にしています。

あと、もう一つ、全ての家庭で、こういうところに子どもを連れてくるかということ、そんなことないですよということ、学校にまずそこを頑張ってもらいたいと考えています。学校の単位で来る場合にはこの1,000円をさらに800円にしましょうと。それと、先ほど県域の話をしました。幾らそうしてもですね、来ることのできる子どもたちというのは、グランシップの周辺の子たちだけです、学校は。はっきりいまして、時間がかかるという問題もあるし、お金もかかります。それをどうするかといったら時間の問題は解決できません、はっきりいって我々も。だから、交通費だけでも解決しましょうと、全額支援ということでやっています。

それと、もう一つ。これはプラスなんですけど、高校生アートラリーということをやっています。これは、県内の文化施設と一緒にあって子供たちにいろんな公演を観てもらいましょうということで、高校生に観てもらいたい公演を一つの冊子にして、まず全員に、静岡県の高校生は9万人いま

すけど、9万人にその冊子を配布しています。高校生はそれを参考に、3つの公演を観たら、本人と家族1人、2人無料招待するというような制度をやっています。それで、まだまだ利用は低いです。でも静岡県の文化施設、ホールの方々の考え方が大分変わってきてくれています。どういうことかという、まずこれに参加しているのは、静岡県公立文化施設協議会に加盟しているのは30館強です。でもこちらと一緒に冊子に載せているのは24館ということで、3分の2、7割の館が入っています。あと残りの3割はどういう館かというと、自主事業をやっていない館が大半です。ということで、自主事業に取り組んでいるところは参加しているという状況です。

さらに、チケットもグランシップは1,000円ということでやっているものですから、それに倣うような形で1,000円が増えています。子どもたちが鑑賞しやすいような環境を静岡は少しずつ今生まれつつあります。しかし、いかにこれを高校生に利用してもらうか、それが大きな課題となっています。

ということで、私のほうは以上でございます。

○田村氏 ありがとうございます。

いろいろなことをやっている施設だというのは、おわかりいただけたかと思います。

1,000円というのは私がいたころから始まっていたんですけど、やっぱり無料の招待のときもあるんですけど、それは来るか来ないかわからないという部分がございますよね。雨が降ったらやめてしまうとか、都合が悪くなる。1,000円で買ってこようと思った子、800円出した子は、全然食いつくように見るんですよね。それで乗り出して見えています。オペラなどを見たときに、終わったらですね、歌手に手を振ったりしています。そのことはすごく大切かなと、これは続けられているのはすごくいいことかなと思っております。どこの地域によって幾らにするかと、1,000円って、1万幾らのものが1,000円ということは、非常に館にとっては大打撃でございますよ。でも子供にとっては、何よりも学ぶものは大きいのではないかというふうに、見て感じたところをちょっとご紹介いたしました。

それではですね、オープンハウスから今日ご紹介する催事がどんなものなのか、チラシもお手元にあると思いますので、ごらんくださいながら長谷川さん、お願いいたします。

○長谷川氏 では、オープンハウスのご紹介をさせていただきます。

赤坂アークヒルズというのは、実は桜の名所でもあるんですね。そこで年に1回、さくらまつりというのを3日間アークヒルズで行っております。それに合わせてオープンハウス、このホール全館無料開放デーというのは、その中の一日で行っております。子供から大人まで、あるいはクラシック音楽の初心者から愛好家まで、どなたにもお楽しみいただけるようなイベントを目指しております。あくまで対象はあらゆる人ということになります。

特色としましては、先ほどお伝えしたオペラと室内楽からなるサントリーホール アカデミーで学んでいる受講生に発表の場をつくるということと、オーケストラやソリストも若い方々に出演をお願いしております。

そして2つ目、企画と運営は、ホールスタッフ総出で行っております。通常、サントリーホールの主催事業は、私ども企画制作部のスタッフで行っているんですけども、これに関しては、もう総務部、運営部、広報部、企画制作部、全員がかかわる形で部署横断的なプロジェクトとして行っております。当日は、全員おそろいでロゴが入った桜色のオリジナルジャンパーを着用しております。

このスライドに挙げた右上の写真、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンに扮している人たちもサントリーホールの職員です。例えばこのベートーヴェンは15年同じ人がやってくれていますし、真ん中のモーツァルトは現在の総務部長が快く引き受けてくれています。このバッハをやっているスタッフは、今はエルダーパートナーとして、表方で普段接客をしているスタッフです。

このオープンハウスは2005年に始まりました。2011年は残念ながら東日本大震災の影響でやむなく中止となり、また2017年はホールが長期の改修休館中で行えませんでした。それ以外の年は毎年行っておりまして、今では毎年延べ1万人を超える方々にご来場いただいております。こちらの写真はそのオープン直前の行列の様子で、たくさんの方に並んでいただいております。こちらのテントは「さくらまつり」のために出店している、お野菜などいろいろなものを売っているマルシェのテントになりまして、広場自体にもぎわった空間となっております。

いろいろお話しするよりは、映像をご覧いただいたほうが早いかなと思います。お手元には、2016年と18年、直近の2年間のチラシのコピーをご用意いただいております。2016年の開館30周年のときの映像をダイジェストでまとめたものがございますので、今から少しだけご覧いただきたいと思っております。

(映像上映)

○長谷川氏 これがオープンしたところですね。開場オルゴールとともにたくさん人が入ってまいりまして、ベートーヴェンやバッハがお迎えしています。こちらは後で紹介するおんがくテーリングという主にお子様向けのイベントなんですけど、この年の場合は、受付してすぐに弦楽器の楽器体験というのを文京楽器さんの協力を得て行っておりました。ヴァイオリンからチェロまで、たくさんお持ち込みいただいております。

これはおんがくテーリングの2つ目のミッションで、外のカラヤン広場でオリジナルの指揮棒を作っています。粘土にストローを刺して手持ちの部分を作って、ちょっとした飾りをつけます。これはワークショップ体験が終わったところですね。

そして、これは先ほど画像でもご紹介した「ステージにあがろう！」という大ホールの演奏の合間の時間帯でして、舞台上に指揮台を2つ並べて自由に写真撮影ができるように、また写真撮影しなくても自由に舞台上に上がれるようにしております。

こちらはガイドツアーですね。スカーフをつけていただいて、ホールのレセプションスタッフが館内の案内をしています。一方で、オルガンの演奏台の周りでも自由に見学ができるようにしております。

これは大ホールのオーケストラ・コンサートの中の指揮者体験コーナーの1コマです。この年は鈴木優人さんが指揮者で、指揮者体験コーナーを引っ張ってくださいました。指揮者体験というと、子供のためのものと思われがちなんですけど、ここでは大人も参加してもらっています。

こちらはブルーローズの様子です。室内楽アカデミーの弦楽カルテットの演奏となります。

こちらはオペラ・アカデミーのコンサートになります。これはブルーローズ横使いのパターンとなっております。

これは後でご紹介しますが、2016年の企画の目玉「「第九」をうたおう！きいてみよう！」で当日募集をした即席の合唱団の人たちです。スクリーンには歌詞対訳を映し出し、初めて「第九」の終楽章を聴く方にも聴きやすくなるような工夫をしております。（映像終わり）

今ご覧いただいたのは、2016年のときの様子です。この年はサントリーホールが開館30周年ということで、何かおもしろいことをするので予算くださいと無理やり前年比1.5倍の予算を獲得しました。それで何ができたかといいますと、横浜シンフォニエッタという小編成のオーケストラに2012年からお願いしているんですが、この年は30周年ということで少し人数を増やしていただき、より充実したレパートリーをお届けできるようにいたしました。チラシの中面のところに曲目を掲載しているんですけども、例えばカルメン前奏曲ですとか、ドヴォルザークの「新世界」など、普段の編成ではできないものをお聴きいただきました。

そして、先ほど映像でもご覧いただいた「「第九」をうたおう！きいてみよう！」という企画をこの年の目玉にいたしまして、「第九」は全部やるともちろん長いので、第4楽章だけをノーカットでやることにしました。合唱参加者はその場で朝から募集しますということで、さまざまところにアプローチをしました。総勢400名ほどの方たちにお集まりいただいたんですけども、当日の朝から募集しますというふうにうたいながら実際はどれだけの方が来るのか、前日の夜は本当に緊張して眠れないぐらいだったんですけども、ふたをあけましたらおかげさまでたくさんの方、特にアルトパートをはじめ女性の方中心に殺到しまして、受付が大混乱するという事態にまでなりました。先ほどご覧いただいたとおり、おそろいのピンクのリボンをつけてもらい、参加された方には指定席のチケットをお渡しして、この席にこの時間になったら集まってくださいという方式で、

本当にこのときこのために集まっていただきました。リハーサルは一切しておりません。ソリストについては、サントリーホールオペラ・アカデミーにゆかりのある指導陣や修了生に出演をお願いいたしました。

合唱の参加団体にも事前にチラシなどを送ったんですけれども、この企画をしたことで、より新しいお客様にもオープンハウスの存在を知っていただけたのかなと思っております。

それから、予算が増えてできたこととしては、チラシをA3の二つ折りにしました。それまではA4の両面、ペラ1枚だったんですけれども、だんだん継続してやっているうちにいろんなマナーのことでしたり、いろんな連絡事項を盛り込まないとなかなか收拾がつかないようなことになってきましたので、地図も含めてより見やすいものにとということでチラシの掲載面を増やしました。

また、場所柄外国人のお客様も多いところですので、英語版の簡易チラシも製作するようにいたしました。

そして1年お休みを経まして、直近の2018年は改修後の初開催ということで、リニューアル内容を前面に打ち出すものといたしました。チラシの見開きに地図がありますけれども、黒く「NEW!」と書いてあるところ、これが2017年の改修で新たに増築した部分です。新しくウエストエントランスという入り口ができて、その奥にお手洗いが増設され、ようやく念願のお客様用エレベーターもできるようになりましたので、オープンハウスというイベントそのものが改修ポイントのアピールになるようにという点を意識して企画しました。

例えば一つの例としては、増築した新エントランス壁面のプロジェクション機能を活用し、これまでサインボード展というのはホールの廊下周りにコピーを掲示するような形でやっていたのをデジタルで、つまりプロジェクションで映し出すようにいたしました。

また、後で紹介する「おんがくテーリング」というイベントのミッションポイントも、昔は紙のポスターを掲出していたところがデジタル化しましたので、館内のデジタルサイネージを活用するようにして、改修ポイントにも注目していただくというようにいたしました。こちらの写真ですね。こちらが新しくできたエントランス部分で、この壁のところに、これはウィーン・フィルの元コンサートマスターのライナー・キュッヒルさんのサインが出ておまして、その横をガイドツアーの参加者が歩いているという写真です。

また、ちょっと見づらいですが、この写真の右側はバギー置き場、ベビーカーを置くスペースとしても活用しております。

そのお隣の写真は、チラシには載っていなかったんですけれども、このときの指揮者が田中祐子さんという女性の指揮者でして、お話がとてもお上手ということで、急遽トークショーを演奏の合間に設定いたしました。これはドリンクコーナーのところでトークショーをやっている

写真になります。

もう一つご紹介したいのが、先ほどから申している「おんがくテーリング」なんですけれども、こちらは1階のところで受付をして、もらったミッションカードに沿って館内をめぐり、ゴールのリハーサル室で音楽ワークショップの体験をしてもらう企画となっております。毎年、内容は変えているんですけれども、2018年に関しては館内のデジタルサイネージでクイズが出まして、その答えがドとレとファとミになっている、このモチーフをミッションカードに記入してリハーサル室に行くと、そこでドレファミのモチーフを使ったワークショップが行われるという流れのイベントになっています。なぜドレファミかという、この年、オーケストラ・コンサートのメイン曲はモーツァルトの交響曲第41番「ジュピター」の第4楽章でした。ここで使われる重要なモチーフということで、このおんがくテーリングのワークショップと鑑賞のメイン曲を絡めた内容にしたのです。これも映像でごいadakimashou。(映像上映)

「おとみっく」という若手のワークショップリーダーのユニットに協力をお願いして、中身から一緒に開発をしていただきました。このために作ってもらったワークショップです。これはアイスブレイクのところですね。(映像終わり)

最近のオープンハウスはこのような形で活動しております。

○田村氏 ありがとうございます。

サントリーホールならではのオープンハウスであったことがおわかりいただけたかと思いますが、それではグランシップのほうの紹介もよろしく願いいたします。

○鈴木氏 それでは、グランシップこどものくにを紹介します。

まず、チラシがお手元にあるかと思いますが。同じ年度のものを用意できなかったものですから、人によっては2017年のもの、2016年のものという形になっています。配置、会場の使い方はここ最近、固定化してきて、大体同じような形になっています。

それでは、「グランシップこどものくに」って、どういう狙いでやっているのということになると思いますが。まず主な狙いとしては、これはグランシップ側の意思ですけれども、グランシップにとって子どものうちから、グランシップに親しんでもらう、親しみを感じてもらう、これが一番大事ということで考えています。

そういう中で、今度は子どもたち、来る人たちにとってどういう「こどものくに」かなということで、そこでこの4つの柱を立てています。

まず一つは、ゴールデンウィークの期間中にですね、家族で安心して楽しめる場としての子育て支援ということで1本目。

2本目がですね、親子で一緒になって創作活動を体験して、刺激し合う場として創造力を育む場。

それで、3本目が日常生活で体験できないグランシップでしか体験できないもの。

4つ目が子どもだけでなく、大人も驚くような空間にしていきたいということで、こういうような狙いでやっております。

それで、昨年5月、どういう状況だったかということ、まず期間はゴールデンウィーク、子どもの日を中心にですね、5月3日から6日ということで4日間やらせていただいています。それで、入場者は約2万人ということで、1日当たり4日間ですから5,000人という形になります。この5,000人という数字はグランシップにとってはですね、非常に大変な数字です。

その5,000人をどのような形で対応しているかといいますと、高校生、大学生、またはボランティアの方ということで、延べ400人、1日当たり100人ぐらいの方にお手伝いをいただいていると。これに当然財団の職員もいますし、外の業者にもお願いしていますので、この運営自体はプラス50人、1日当たり150人ぐらいの人数でこれを動かしています。それであと、協賛、協力いただいている企業なり団体なりが現在30社という状況になっております。

それでは、場所をどういうふうに使ってどういうふうな内容になっているかということで、平面図ではこういう形、先ほどのパンフレット、チラシを見ていただけるとご理解いただけると思いますが、それを文字にあらわすとこういうような形になります。

先ほども田村さんのほうからもお話がありましたが、基本的には全館使用という形になっておりまして、地下と9階以上は参加者の控室等で使っているということで、1階から6階まで、この空間を使ってやらせていただいています。メインの会場は6階の展示ギャラリー、ここでテーマに応じたアート体験という形になっておりまして、あとそのほか交流ホールとか共通ロビー、さまざまところを使っております。

こうしたいろいろなさまざまな場所を使っていますけれども、通常は共通ロビーでは、何か催事をやったりとか、そういうことがあり得ないと思います。これはどこの館の方も一緒だと思いますが、この場合だけでは特別にそういうような形でやっています。また交流ホールは、レセプションルームという形、もともと設計になっています。そこで子どもたちが体操教室をやるとかですね、全然違った使い方をするというような形で。いろんな場所がありますが、その場所をどういうふうに使えるか、何がどういうものが必要なのかということで、いろいろ工夫しながら使っているというのが今のやり方です。

さらにはですね、先ほども世界お茶まつりの話をちらっとしましたけれども、静岡はお茶ですので、茶園があります、小さな茶園が。せっかく5月の茶摘みの時期ですので、お茶摘みできるんじゃないということで、最近はその子どもたちにお茶摘み体験をしてもらっています。ですから、使えるものは全部使いましょうという考え方で運営しています。

それで、どんな感じかという、写真ですから、余りわからないかもしれませんが、メイン会場、今年度は「へんてこりんハウス」という形でやりましたので、いろいろなものを普通でしたら小さいものをすごく大きくして、それを体感してもらおうというようなことをやりました。ここが20メートル四方の展示ギャラリーです。ここにいろいろなものを作りました。

あと、6階の先ほどレセプションルームで体操教室だよと言いましたが、こんな形でやっております。それであとは3階の共通ロビーおきがえコーナーということで、これはいろんな衣装を着てもらって、子どもたちが。着物を着たり、洋服を着たり、お着がえして記念撮影をして、これ子どもも喜んでいますが、どちらかというと一緒に来た親御さんが喜んでいますが、それとあとも遊びということで、これはグランシップサポーターの方々がいろんな遊びを考えて、子どもたちに体験してもらおう。これをやっている人たちはですね、一番上は90歳の方です。それでサポーターは今だんだん年齢が高くなっていて、大体リタイアした人が多いです。ですから、相当年齢の高い、おじいちゃん、おばあちゃんが子どもにいろいろ遊びを教えているよという感じのところ、ここは。

それで、1階、ここは大ホールのところ。大ホールは協賛企業の展示ブースがあったりもしていますし、また休憩スペースになっていますが、そこに静岡市の児童館に来ていただいて、静岡市の児童館の方が子どもたちと一緒に遊ぶということで。

1階の中ホール。ここは、静岡児童合唱団の方々が合唱のワークショップという形でやってくれています。そして1階のエントランスロビー。ここではアウトリーチの登録アーティスト制度というのをグランシップは設けていますので、その登録のアーティストの人たちにロビーコンサートをやっていただく。

「こどものくに」は、単に財団だけで、グランシップの中だけでやっているんじゃなくて、外の方もいろいろ協力していただいているという形になります。

以上でございます。

○田村氏 ありがとうございます。

サントリーホールと全く違ったいろいろなものがあるという、さっき一番上の方は90歳とおっしゃっていましたが、八十幾つのおばあさんが、4日間正座しながら子供に折り紙を教えているというほほ笑ましい光景もございます。

今いろいろなことが続けて実施されている事例をご紹介いただきましたが、でもホールとして何でこんなことを始められたのかと、皆様思われるかと思しますので、何でサントリーは、オープンハウスを始めたのか、その辺をちょっと。

○長谷川氏 私は2003年に入社したものですから、オープンハウスがキックオフとなったときには、まだ入

社2年目の右も左もわからない状態でしたが、やはり新規のお客様を開拓したい、来場者をもっと増やしたいという思いがございまして、当時あった営業開発部という部署を中心に、イベントという事で企画制作部だったり、当時のエデュケーション担当部署であった広報部も含めて2004年の夏に翌年の春の実現に向けてキックオフ、協議を始めたというふうに聞いております。その時点からターゲットは子供ではなくて、あくまでも広く一般の方々に向けたものと意識していたようです。初年度の入場者の目標は3,000名でした。ただ、実際には2005年の初回は、5,642名の方に来ていただけました。

先ほどお伝えしたとおり、部署の混合チームとして企画運営しているんですけども、これは恐らく私どもでは初めてのことだったのではないかと思います。低予算でまさに手弁当の新しい企画を、いろんなアイデアを出し合って、知恵と工夫で何とか成功させようという気概が当時のホールスタッフ全員に満ちていたのではないかと思いますし、私自身も何か新しいことをサントリーホールが始めるというのでワクワクしたのを覚えております。

ただ、オープンハウスは私どもが最初ではございまして、都内の先行事例としましては東京都中央区晴海にあります第一生命ホールさんが2002年から既にオープンハウスを開催しておりました。私も実は、大学院時代にこちらでインターンをしていたんですけども、第一生命ホールの主催事業を行っているのがトリトン・アーツ・ネットワークというNPOで、その事務局とボランティアのスタッフ皆さんで企画運営している地域密着型の無料イベントである第一生命ホールさんのオープンハウスも参考にしながら、でもサントリーホールらしいオープンハウスは何だろうという観点で、いろいろアイデアを出し合って始めました。

○鈴木氏 こどものくには、ちょうど今から13年前に始まりました。私が県から文化財団に出向した年です。グランシップは、土曜日だろうと、日曜日だろうと、4月1日から出勤です。企画制作課長として出勤してたしか3日目ですね。この事業を発案したNPO法人の代表で財団の理事であった方から電話が入りまして、こどものくにのチラシを送ったから、私が指示するところに配布しなさいよとって、一番最初それなんですね。それでもう1カ月後には、このこどものくにをやらなきゃいけないとって、何かわからない中でバタバタとその理事といろいろ打ち合わせをしたり何なりして準備した上で、6日間、一番最初やりました。初日の朝方まで理事と一緒に準備して。たしか朝の2時までやって、それで帰って3時間ぐらい寝て、また朝8時ごろには出てきてということでオープンを迎えたというようなそんな思い出のあるものなんです。そういうようなことで、これは最初理事が、こういうことをやろうよと財団に提案したようです。

それで、理事がなぜこの企画を持ち込んだかといいますと、静岡市出身の児童文学者で、絵本作家ですけども、江崎雪子さんという方がいらっしまして、その方が亡くなられ、この江崎雪子

さんの絵本を子どもたちに見てほしいと、そういう意図がありました。それとあと一つ、グランシップはこどもの日を中心にゴールデンウィーク期間中に何か今まで催事をやっていたかということ、子ども向けのをやっていないよねと、じゃ何かぜひやりなさいよということで持ち込んでくれました。ですから、要は子育て支援をしっかりとやってみたらどうなのというのは理事の提案だったですね。

この6日間理事主導で私たちいろいろ走り回って何とかやって、来た方々が確か1万5,000人ぐらい、親子連れが来ていただいたんじゃないかなと。初めてにしては、たくさんの方々が来ていただけだなと思っております。

それで、1回目に使用した場所はどんなところかということ、先ほど見ていただいたところよりもちょっとこじんまりしております。ただ、メイン会場の展示ギャラリー、これは一緒です。それであと交流ホール、ですから6階というのは一緒です。それで、このときと違うのは、6階のロビー、実はグランシップの6階のロビーというのは結構広いんですね。このときはゆめのおきがえコーナー、当時は夢に変身体験コーナーということで、結構ロビーもうまく使っていました。3階の共通ロビー、こちらのほうは模型のタミヤをご存じだと思いますけども、タミヤに協力していただいて、模型を作って走らせたというような記憶があります。それであと、2階の県立中央図書館の絵本の広場では、絵本の読み聞かせと、こういうようなことをやりました。こちらが当時のこれ理事が作ったチラシです。こんな形で本当に盛りだくさん、毎日いろんなことをやるというようなことで、相当忙しかったですね。何か知らないけど、やらなきゃやらなきゃという感じでした。

実は今のこどものくにと違うのかといたら、基本形は私は変わっていないと思います。担当はどういうふうに見ているかあれですけど、私自身は基本的な柱というか、形は変わっていないんじゃないかなと。ですから、理事がこういう形で提案してくれて、実際に実践してくれたということについては、我々はいいい勉強になったんじゃないかなと思っております。

以上です。

○田村氏 ありがとうございます。

実はその提案されたところにちょうど私が、グランシップで仕事をするようになって、理事の提案からこんなのがあって、職員が云々というお話を当時の鈴木企画制作課長からありました。その辺のお話を今度は鈴木さんのほうからお願いします。

○鈴木氏 そういう形でテーマを決めて、絵本の広場ということで1回目やりまして、2回目以降、こういう形でテーマを音、紙、落書き、布、光、木ということで、今年度が木、来年度はテーマは未来だそうです。最初のころは非常に具体的なテーマでやっていて、形にしていったよということなんですけど、今は逆に非常に抽象的なテーマを取り上げてやっていくというような形になっています。

最近は、私この辺については一切かかわっていないものですから、どういう意図でどういうふうに生まれているか、よくわかりませんが、でもおもしろいなと思って、私は見えています。同じテーマを繰り返しやるのではなくて、毎年毎年いろんなものに変えて、同じ人が来ても楽しめるような形のものにしています。これは担当、またはかかわっている大学の先生がいろいろ工夫していただいているんだなということで、非常にありがたいと思っています。

それと、先ほど田村さんのほうから、1回目から2回目、3回目どうだと、ちょうど田村さんがいらしたときが2回目だったんですね。2回目でそのときのお話をちょっとさせていただくと。1回目、1万5,000人来たから人数的には大成功ですよということなんですが、財団的には大成功かといったら、大成功じゃありませんでした。なぜかというと、理事が主導で、要は財団の職員からしたら引っかけ回されたという印象だったんですね。それで、もうこんな1回限りでいいよと、2回目はないよねというのが職員の考えでした。

それで、でもなぜ職員がそういうふうに考えたかということ、この企画の狙い自体はいいけれど、やっぱり誰が主導していくのかと、財団の事業なのに、なぜ理事が動かさなきゃいけないのと、そこがどうなんだろうというところに、すごく疑問を持っていました。

それとあと、もう一つはすごくお金がかかりました。結局、理事がやっていますので、誰もコントロールしないということですから、我々理事に言われたことを「はい」としか言えない。相当のお金を使いました。幾らだかちょっと言えないですけどというところで、そういう意味で職員は大反対です。

ただ一方で、周りからはこれ続けたほうがいいんじゃないという声が相当上がってきました。それじゃ2回目はどうするかというところで、職員は全部背中を向けてくれました。協力しませんと。「やるんだったら、課長やればいいんじゃないですか」ということで、「じゃわかりました、やりましょう」と。右も左もわからない中でいきなり放り込まれたような感じで、こっちは意地ですからやりました、はっきりいって。

ただ、私も1人でできるわけじゃないものですから、私のすぐ下のスタッフ、それは当然私の指示は受けてくれますので、相談にも乗ってくれたし、一緒に動いてくれてやりましたけど、ただそのときやるに当たって、発案者の理事に相談したんです。「理事、来年については財団のほうで引き取らせていただいてやりたいと思っているんですけど、いかがでしょうか」と言ったら、「ああそういう考えを持ってくれたの、うれしいわ」と、いの一番に喜んでくれました。理事も2回目以降、やるつもりはなかったんですね。「とてもじゃないけど、大変だよ、こんなものを私ずっとやっていたら死んじゃうわ」と、そのとき言いましたから。だからそのとき感じたのは、最初から毛嫌いしないで、誰でもしっかりと話してみることが大事だなと思いました。ただ、理事から

は、「やりたいことが一つある。おきがえコーナーをやっていききたいから、それはどこかスペース設けてね」と言われて、「それだけでいいですか」と確認して、「あとの企画は私のほうで、財団のほうで仕切りますから」とお伝えして、それでやりました。

そういう形になったとき、そのときにやっぱり職員から条件をつけられ、「もしやるんだったらお金はかけないでください」と言われて、「わかった、じゃそれは1回目の半分の予算でやりましょう」ということで、半分でやりました。

そのかわり、どのような形でやるかというのは、非常に苦労しました。何を考えたかという、外の方にいろいろ手伝っていただくというか、我々のところで作り込んでいくとお金がどんどんかかっちゃいますので、外の方々にこういう子育て支援とかこういうことに興味のある方、一緒にやっていけそうな方々に声をかけて、ご協力いただいてやりました。それで何とかできました。

何とかできた結果として、職員はどうなったかというのですね、「理事はこういう形でかかわるんだ、じゃ私たちできそうだよ」ということと、「お金はそんなにかからないし、趣旨もいいわよね」ということで「やりたい」と。あと、ただもう一つ、「課長に任せておくと危ない、自分らが今までいろんなことを経験しているから自分らに任せてくれ」と。課長は必要などころだけ、例えば企業回りとか、「そういうところは課長一緒に行ってください」と。

そういうことで今度は皆さん中心で動いてくれるようになり、関係者の変化というのは、そういうことで発案者は変化した、職員も変化した。

さらにサポートさんが加わるとともに、これは新人の職員が担当するのにいい仕事だ、いいイベントだということで、研修の場として、新人職員といっても1年たった職員ですけど、1年経験した職員が担当すべきだということで、そういうような研修の場にしてくれました。職員がいいと思ったらいろいろ自分らで工夫してくれて動き出したということで、だから最初私も、背中を向けられたときにまいったなこれとは思いましたが、次の年、そういうような形になってくれましたので、やってよかったなど。話すことと、やってみること、これが大事なのかなと、そのとき感じました。

そして、サポートさんにも、サポーターというのは、これグランシップのボランティアの方ですけども、サポーターさんの参画も呼びかけて昔遊び等やっていただいたりとか。

それで1回目のときには大学教員はかかわっていません。2回目のときに、自分らがありあわせのものでつくっていったときに、彫刻の楽器ということで、木製の楽器をつくる方がいらっしやって、それを展示ギャラリーにどういうふうに配置するか、展示するかということが素人、やっぱり我々ではできないということで、美術の先生にお願いをしてアドバイスを受けながらやりました。

最初にそういう形で、2回目にかかわっていただいたんですが、3回目からはもう少しかかわっ

ていただけないですかとお願いしたら、そうしたらテーマはどういうふうにするかというところから入っていただいて。それともう一つ、じゃそのテーマに基づいてメインの展示ギャラリー、そこをどういうふうに作っていくかといったときに、じゃこれは自分が教えている学生にいろいろやってもらおうということで、学生がそこで参画をするというような仕組みをつくりました。ですから、当分の間、その先生、テーマの設定から始まって、展示ギャラリーについては自分の学生を使って運営をしていくというような仕組みができました。

そして、その後いろんな事情があつて、複数の大学の教員がかかわるようになって、さらにそれが今度は大学が特定の大学だけでなく、幅広くなっていったというような形になります。

それで芸術家については、一番最初理事がやったときから、絵本作家であるとか、舞踊家であるとか、いろんな方々がかかわりを持ってやっていましたし、さらにそれがさまざまな芸術家が参画するというので、芸術家の方々はどんどん今広がりつつあるということになっています。

それと、企業については、一番最初は理事の関係。理事のお知り合いの会社が協力していただくよという形だったんですが、職員が積極的に動くようになってくれるから、どんどん開拓をしてくれまして、先ほども説明したように、今は30社の方々が参画をしてきているという形になっています。

それで、企画の変化ということですが。最初はやっぱりどういように安全を、2,000人とか3,000人と、たくさんの方々が、それも親子で来る、小さな子どもたちが来るよといったときに、一番大事なのはおもしろいというよりも、いかに怪我をしないで、無事帰っていただくか、これが我々一番意識したところです。私もそれ2回目やったときにスタッフに怒られました。あんなやり方をしちゃだめだと、もっと人もしっかり配置しろと。ああそうだよなと思いました。

それとあともう一つは、2回目のときに実は事故がなかったのかと、実はありました。芝生広場に木製の遊具を置いたんです。そうしたところ、木製の遊具で、木製の遊具は外の方が持ってきてくれものですから、当然その人が管理してくれるものだと思っていて、我々は一切タッチしなかったんです。そうしたら、木製のすべり台の上るところに、鐘をつけてあったんです。鐘のところには鐘を鳴らすための金具がついていて、それがきちっととまっていなくて、子どもがやったらそれが落ちてしまって、まぶたのところには傷ができて。その親御さんも最初は「大丈夫です、結構です」とか、そんなにきついことは言われなかったんです。けれども、何回か顔を出しているうちに、「これで傷が残ったらどうするの？あなたは」とか、相当親御さんに特にお母さんにそれは言われました。ただ、たまたまその方が行った病院が県立総合病院だったものですから、病院に「本当に傷跡残るの？」と問合せをしたら、「残らない、大丈夫だよ」と言われたので、ちょっと安心しながらも、でもこちら平身低頭おわびをしてと。やはり安全確保、これは大事だなと、そのときつく

づく、スタッフに言われなくても、それは実は自身にしみていたんですけれども。その後、「企画毎の来場者の滞留時間を予測して、すべての人が安全に動きがとれるようにしなさい」ということを逆に私が指示を出しました。

そんなことで、最初の場合は安全確保、これが第一主義ということでやりました。それでそういうノウハウが蓄積されていく中で、今度は企画の点もいろいろ難しくなっていって、木をテーマにしたことがありました。そのときに今かかわった人だけでは、なかなか企画がつかれないよということで、どんなことを留意したらいいのかということも含めて専門家、これも大学の先生ですけど、アドバイスを受けるような形になりました。

それとあともう一つは、企画鑑賞をしていた教員の方が短大の保育科の先生だったんですが、四年制の造形学部にも異動されて、今度は授業の一環としてはできなくなって、連動性がなくなりました。

そういう変化が起き、複数の先生がかかわる中で、それぞれの大学の学生さんたちに協力してもらおうという形になって、どんどん今幅が広がっていきました。それで中身についても、安全第一主義から創造性。やはり一番大事にしていきたいところ、創造力を養っていくというところで、そちらのほうに移っていっていると。

それで現在どうなっているかというと、高校生、大学生、90歳、それで芸術家とボランティアと多種多様な企業が協賛ということで、今さまざまな人に支えられているイベントになっています。

いろんなタイプの家族があると思うんですが、どんな家族が来ても1日ゆっくり楽しめる場、そして一度来た子がまた来てもらえるような場に今なってきているんじゃないかなと思っています。

○田村氏 ありがとうございます。

私が静岡にいたころに始まっていたというお話はしたと思いますが、実は、私はその前に、チルドレンミュージアムというものがアメリカには300以上あります。でも日本にはまだ残念ながら3つか4つしかないのです。そういうものがもっとあったらいいという話を、放送でしたりしていましたので、そういう場が日本は少ないということは、よくわかっておりました。皆様一度チャンスがあったら、丹波篠山のチルドレンミュージアム、ネットでごらんになってもわかりますので、ごらんになってみてくださいませ。子供が本当に心置きなく遊べる場というのがあったらと思いついて、そういう場に多目的複合施設なわけですから、なればいいということもあって賛成したということもございます。ただ、クオリティーは上げてほしいと思っておりました。そういう意味でサントリーのほうは、最初からどちらかというとクオリティーはある一定のものを狙ってやっていらっしやってきたと思うのですが、いかがでございましょうか。

○長谷川氏 今の鈴木様の壮絶なドラマを伺ってからの後では、なかなか話しにくいものがございますけれ

ども、私どものオープンハウスの「人」に関する変化については、至ってシンプルでして、我々はあくまで自前のスタッフのみでやっております。ボランティアスタッフ、例えば一時期サントリーの社員がボランティアとして当日のみかかわるといった年もありましたが、やはりもともとホールのことを知らないとなかなか成り立ちにくいということで、ずっと2005年から変わらずホールスタッフの自前ということでやっております。

また、年ごとにテーマを設けるということも特にしておりませんで、至ってシンプルにホールの無料開放デイということでやっているんですけれども、中身についてはいろいろ変遷がございました。

先ほど田村さんがクオリティーのことをおっしゃってくださいましたが、実は始めた当初は、大ホールのオーケストラ・コンサートは、学生のオーケストラにお願いをしていました。慶應義塾大学のワグネル・ソサイエティー・オーケストラに交通費とお弁当だけで出ていただいていたという時代があり、とにかく予算をかけずにお客様に楽しんでもらうということに注力しておりました。そのときブルーローズ、小ホールのほうは、主にクラシック音楽のイントロクイズだったり、ホールができたときの古いドキュメンタリーDVDを上映したりなど、イベント会場という使い方をしておりました。

また、どのくらいお客様が来るかわからないということもあって、午前からいらしていただけるように「チャリティ朝市」として、ホールのグッズやアーティストのサインなどを販売して収益を港区に寄附する、そういった試みも行っておりました。

先ほどご紹介した「おんがくテーリング」は2008年から始めまして、それはなぜ誕生したかというところ、最初のころは楽器づくり体験というのを行っておりました。最初の年はストロー笛づくりとして講師の先生をお招きしてリハーサル室でやっておまして、その翌年はミニカズー、声を出すとブーと振動で音が鳴る、そういう手づくり楽器をホワイエのところで随時作れるようにし、我々が材料となるクリアファイルをひたすら正方形に切るなど何人来るかもわからないまま準備をしてというふうにやっていたのですが、おかげさまで回を重ねるごとに来場者が増えて、うちのホワイエも決して広くないものですから、それこそ先ほどの安全管理の話じゃないんですけれども、だんだんお客様が増えるにつれて、これは少しでもなるべくたくさんのお客様に同時に楽しんでもらえるような仕掛けを何か考えないといけないという必要に迫られて、私自身の発案で始めたものです。

形はいろいろ変えていますけれども、とにかく館内を周遊する仕掛けをつくる。そして少しでも1カ所にお客様をとどめない工夫、混雑を少しでも避けるということで、「おんがくテーリング」を立ち上げました。そして、2010年にはついに初の来場者数、延べ1万人を達成したということになります。

私は2009年から今まで10年間オープンハウスを担当しているんですけども、最初は以前のスタイルでやってみて、少しリニューアルしてみたいと思って、2011年からリニューアルを仕掛けていたんですが、残念ながらこの年は中止になりました。

ここで2008年のチラシの画像をご覧くださいませう。細かいところは見えないかと思うんですが、お配りしたチラシのコピーとは大分イメージが違うかと思います。より手づくり感のあふれたチラシとなっております。このときは、プロのイラストレーターさんに頼んで描きおろしてもらっていますが、最初の年はチラシのイラストも絵心あるホールスタッフに描いてもらったりしていました。大ホールでは、舞台がまっさらな状態からステージセッティングを公開したり、リハーサルを公開したりしていましたし、このときもまだ慶応ワグネルさんに出演をお願いしていました。ちなみにこのときの指揮者は山田和樹さんです。今ではもう日本だけでなく世界でも活躍するようになった山田和樹さんも、実はオープンハウスに、まだブザンソンで優勝する前のことですが、ご出演いただいております。

そして、ブルーローズ、ここにもあるとおりドキュメンタリー「サントリーホール誕生」上映、みんなでクイズ「ドレミファ・ポン」、それからワグネルアンサンブルライブとあるのはワグネルのメンバーに室内楽の演奏をしていただいております。ホールの館内地図もアクセスの地図もかなり小さくて、文字も本当に小さなフォントで文字だらけのチラシでございました。

これを経まして、2012年に、ほぼ今のスタイルのオープンハウスに変えました。新たにこのチラシ表面にありますロゴを制作し、スタッフジャンパーも更新しました。そして演奏面では小規模であっても、何とかプロフェッショナルの演奏を聴いていただきたい、一番最初に立ち上げたときはとにかくホールの中に来てもらいたいという思いが強かったんですけど、やはりいい響きをいい音楽で聴いていただきたい、そういう思いにだんだん変わってまいりまして、横浜シンフォニエッタという山田和樹さんが学生時代に立ち上げた若手のプロ・オーケストラに出演をお願いするにいたしました。今でも継続してご出演いただいております。

また、ブルーローズのほうもやはりコンサートホールであることを認識していただきたく、サントリーホールアカデミー、オペラ・アカデミーと室内楽アカデミー、ちょうど2010年に室内楽アカデミーもできたものですから、彼らの発表の場として3公演ずつ出させていただくようにいたしました。出演者が若手ということで、このイベントの趣旨、たくさんの方にいい音楽を届けたい、無料でやりますということをきちんと説明して理解していただいた上で、クラシックになじみのない方でもどうやったら楽しんでいただけるか、トークの内容も事前に打ち合わせをして、少しでも親しみやすくなるように出演者と一緒にプログラムを作っております。

一方で変わらないこととしては、先ほど写真でもご紹介したホールスタッフが扮する3人の作曲

家、これはオープンハウスの伝統として、人は変わるかもしれませんが、今後も継続してまいります。

それから、イベント終了後にはホールスタッフ全員に振り返りのアンケートを実施しています。本当は反省会を顔を交えてやるのがいいんですけども、なかなかそれぞれの持ち場が忙しいものですから、まずはアンケートを出してもらおうようにしてしまっていて、それをまとめて翌年の企画運営に活かす、そういうサイクルで回しております。ちなみに、部署横断的なプロジェクトと言いましたけれども、そもそもイベントのスタッフチーム分けを考えるのが実は一番大変でして、部署ごとのバランスをとったり、人間的な相性も少し加味したりですとか、事前の業務分担も含めてなるべく偏りはないようにしたいなという思いで、そこは毎年なかなか頭を悩ませているところでございます。

○田村氏 あれだけ一生懸命なさって、サントリーホールだし、何万人もいらっしゃるとおっしゃったので、皆様相当知られているだろうなというふうにお思いかと思いますが、この東京に住んで、どちらかというとサントリーホールに通うこともある私が、毎年桜の季節お花見には行っているのですよ、桜を見るには必ず行っていたのですが、このオープンハウスを知ったのはたった4年前でございます。ということは、東京で知らない人がまだたくさんいらっしゃることだと思えます。その辺はもったいないなと思ひまして、宣伝カーになって、皆様に教えて、「ええ、本当ですか、それは行きます。」「子供を連れていきます。」と。ゼロ歳児オーケーなのです。出入りオーケー、私が一番びっくりいたしましたのは、初めて行ったときに、おすし屋さんがおすしを握るときのあのままの姿で隣に座っていらしたのです。休憩タイムにちょっと寄られたんだろうと思うのです。それにすごく感動したのを覚えています。きちんと着がえて、時間どおりに行ってというのではなくて、そういう自由に入出りできる、ゼロ歳児オーケーというのも泣いたらお子さんを上手に一緒に外に出るといことも可能なそして途中から入ってくるのも可能なというこれがすごくいいなと思っております。

ちょっと時間が足らなくなり申し訳ございませんが、皆様がなさっている取組はある種の普及活動だと思います。その大切さというのを実際お感じになっていると思ひますし、何にやっぱり一番気をつけたらいいか、その辺を会場にいらした皆様に参考になるようなことを含めてお話をいただければと思ひます。

では、鈴木さんからお願いいたします。

○鈴木氏 今回私自身、こどものくについて久しぶりにここを振り返ってみて、自分がかかわっていたときと大分変わってきていて、すごく中身も私が見てよくなっていると。毎年見ているつもりでいたんですけども、やっぱり今回本当はもう少し担当にも話を聞きたかったんですけど、余り聞くこ

ともできなくて、私が資料だけひっくり返してみたって、ああそうなのか、こういうこともやっ
ていて、ここまで出来ていてすごいよなと思いました。でもそれがじゃ財団の中でそういうような
認識になっているかという、毎年同じことをやっているよねというようなそういう認識に多分、
多くのスタッフはなっているんじゃないかな。財団職員全員が参加するような形になっていますけ
ど、中には「何で俺、これ手伝わなきゃいけない」というようなことを言うスタッフもいます。

最後にお伝えしたいことは、今ここに見えられている方というのは、多分すごく一生懸命前向き
にいろいろなことを考えられて取り組んでいらっしゃると思います。それでいろんなことをやられ
ているんじゃないかなと思います。でも、自分のやられていること、すばらしさを自分自身も自覚
されているかどうかというのがちょっと気になります。今うちのグランシップの文化財団のスタ
ッフが一生懸命いろんなことをやってくれているのに私自身も自覚できていなかったし、うちのスタ
ッフもどこがどういうふうにするのかというのをどういうふうにするか、そこは今日帰って、話ししてみたい、聞いてみたいなと思っているんですけど。皆さんぜひ、ご自
分のやられていること、どこがすばらしいのかというのをしっかり振り返ってみたらどうかと思
っています。そしてそれをしっかり外に伝えるということも大事じゃないかなと。それが多分公立
文化施設、皆さんのやっているところの施設の必要性というか、必要性、そういうことを外に伝え
ていくことになるんじゃないかなと。そうすれば、より一層多くの方々が興味を持っていただいて、
また皆さんが企画したものにもどんどん来ていただけるようになると。今回これをまとめてみて感
じたところです。

ですから、私自身も帰って、ちょっとスタッフには話を聞いてみたいなど。そしてスタッフと一
緒になって、財団のやっているグランシップのすばらしさ、それをしっかり外に伝えていきたいな
と思っております。

以上です。

○田村氏 長谷川さん、どうぞ。

○長谷川氏 今、鈴木さんがおっしゃったことは本当に私もその通りだと思っていまして、先ほどまだまだ
オープンハウスが知られていないというお話がありましたけれども、いかに伝えるかというのも本
当に大事だと思っております。改めてこの取り組みに当たってのポイント、このセミナーのテーマ
が「“ハコ”を活かして！」ということですが、私が考える“ハコ”というのはですね、単にハー
ド、つまり建物ではないと考えております。やはりそこに集う人々、それは聴衆だけじゃなくて、
ホールスタッフもそうでした、その人々のスピリッツ、精神とそしてコンテンツ、中身があつての
“ハコ”ではないかと私は考えております。ですので、このオープンハウスもサントリーホールの
ソフトとハード両方のよさをPRできるような場にして、それぞれの企画内容を考えてくださいと

常々チームリーダーにはお願いをしております。

では、取り組みに当たってどういったことがポイントになるか、いろいろちょっとこの機会に考えてみたんですけれども、ご自分が属していらっしゃるハコの強みにはそれぞれに特徴がやはりあると思います。サントリーホールの例がどこまで参考になるかわかりませんが、では自分のハコでは何が活かせるんだらう、その強みや周囲の環境を徹底的に分析をした上で、その強みは活かしていただければというふうに思っていますし、我々が事業をするに当たっては、常にミッションやメインターゲット、特に子供の場合はただ漠然と子供というのではなく、どのくらいの年齢のお子さんなのか、それはかなり意識するようしております。

また、このオープンハウスでどんな人にどのようになってもらいたいのか、このホールでどのような光景を見てみたいか、どのような音を聞きたいか、いろいろ考えてみました。特に30周年の予算はついたけど何をやろうかといったときに、やはり私はこのホールの中に人があふれて音楽で笑顔になっている、そういう絵を見たいと思ったんですね。そうしたときに、日本の「第九」合唱の人口というのは凄まじいものがございまして、集まってくださった客席400人の大合唱とオーケストラとソリストとが一つになって、その場限りの一期一会の「第九」を生み出すことができた、この絵を下手袖から見られて、私自身すごく充実した気持ちになりました。こういった普及企画をやる場合は、一方通行、ただ情報を与えるだけにならないというのが大事ではないかと思っております。特にお客様にどのように自分ごととして捉えていただくか、それにはやはり何かしらの体験というのが有効ではないかと考えておりますので、オープンハウスでもなるべくいろんな体験の要素を取り入れるようしております。

先ほどサントリーホールの普及企画を「ENJOY! MUSIC プログラム」と名付けているとお伝えしたんですけれども、もともとは「エデュケーション・プログラム」と片仮名で表記をしておりました。ただ、エデュケーションというと、どうしても日本語でいう「教育」のイメージが強いのではないかと思います。教育という日本語の言葉ですと、どうしても上から押しつける、知識を与えるみたいなイメージが強いかと思うんですが、本来エデュケーション、エデュケートという言葉はラテン語の「エデュケート」の中のデューコ、引き出すという意味が語源になっているそうなんです。教えて覚えさせるということではなくて、その人の才能を引き出す、そういう意味合いを持った言葉なんです。ですので、音楽においては、知識云々というよりはとにかく聴いて楽しんでいただく、そのために我々は私どもの教育普及プログラムを「ENJOY! MUSIC プログラム」と呼んでおります。

そして、最後はちょっと偉そうに書いてしまいましたけれども、企画はやはりチャレンジ精神、先ほど鈴木さんもまずやってみることなんておっしゃっていましたが、サントリーでも「やってみ

なはれ」という言葉がございまして、とにかくチャレンジしてみる、そういうスピリットがございます。何かしらチャレンジして企画をするんですけれども、では回しの部分、運営については、これは日ごろのチームワークがものを言うのではないかと考えております。

制作というのは割と孤独なものですけれども、何かしらイベントをやるに当たってはいろんな人がかかわることになりますので、たくさんの人に気持ちよく仕事をしていただくということにおいては、やはり日ごろどれだけコミュニケーションをとっておくか、それも非常に重要なことだと考えております。

サントリーホールは民間のホールですけれども、我々も先ほどの社会の還元という点では公共財という考え方でおりますし、今はもう公益財団法人になりましたので、ここにありますミッションのもとで活動しております。

そして、クラシック音楽の未来を考えたときに20年後、50年後の聴衆層がどうなっているか、今ただでさえオーケストラの定期演奏会はもうかなりご高齢の方でいっぱいです。車椅子のスペース全てが埋まるような状況なんですけれども、ではその中で未来の聴衆となるお子さんたちが音楽を好きになれるような環境づくり、そして耳をひらくという言葉は私はよく使っているんですけれども、そういった取り組みというのを重視したいと考えております。そして一方で、先ほどもお伝えしたような人材育成、次世代の音楽界を担う存在を片方では育てて、そしてオープンハウスのようにあらゆる方がアクセスできるホールとなるように一生懸命頑張っているところでございます。

○田村氏 ありがとうございます。

本当に時間の配分が悪くて申しわけなかったのですが、何かぜひこれだけは聞いておきたいということがおありのようでしたら、どうぞ挙手をお願いいたします。よろしいですか。

それでは、全国から今日はお集まりいただいていると思いますので、どんなことをやったらいいかという方には、どんなこともありますよということで、対照的な2つの施設に今日はお登場いただきました。それも10年以上続けているということでございます。10年以上でも私も4年前に知ったと先程申し上げましたが、比較的サントリーに近いところに住んでいるのですよ。それなのにそうだったということでございますので、皆様広報されているとしても、どのぐらい届いているかというのは、なかなか難しいことだと思います。

それで、今日一つだけチラシを「踊る」という地域伝統芸能祭りというのをお入れしておきました。皆様どこの地域にも伝統芸能というのはおありだと思います。皆様が活用するのに気づかれたらいいかなと思ひまして、あえて入れさせていただきました。

残念ながらごめんなさい、これは無料ですけれども、1月31日に締め切っているものですから、これから申し込むというわけにはいきませんが、NHKで放送はされます。だからごらんになっ

てみてください。毎年ですね、地域から公募して選ばれるということで上演されているという、皆様が紅白歌合戦をやるホールでできるというので喜んでいらっしゃるというふうに聞いております。

そして、これが発展形ですね、去年のシンポジウムの際にもご紹介した島根県のグラントワという県立のホールがあります。そこでは地域の石見神楽をとり上げてきました。そして、地域の方が、大阪に常設の石見神楽を見る小屋をつくる、3月にオープンするそうです。そんなところもできているということでございますね。それがどのようになるかというのはちょっとわかりませんが、そういう試みもある。皆様のところには、必ず地域伝統芸能というのはおありじゃないかと思っておりますので、それをほかの県の方は絶対やっってくださいませぬ。皆様が地域を大切に思う心がおありだったら、その地域の歴史と文化というのを大切にされるということも、ひとつ子供にとっては大切なことではないかなというふうに思っています、このチラシを今回入れさせていただきました。チャンスがあったらどうぞごらんくださいませ。

何か思いついて質問という方、いらっしゃいますか。よろしゅうございますか。

今日サントリーホールの長谷川さん、それからグランシップの鈴木さん、お二方にいらして、これまでのご経験上からお話をいただきました。皆様、ここで伺えなかったら、直接お聞きくださいませ。参考になることがあれば大変うれしく思います。

ぜひ皆様、ハコだけは2,200もあるわけでございますから、箱物行政と言わないで、それをどうやって活用するかということを考えるということは、大切なことではないかと思っております。これから建てるのでは、とても大変なわけですよ、相当お金がかかって。それが日本の場合はできている。実は海外には例がないことなのです。日本だけなのです、こんなにたくさんあるのは。それを活用しないという方法はないかなというふうに思っています、あえて今回はご紹介させていただきました。皆様の施設で何か楽しい催しが開かれることを願って、ぜひ長谷川さんや鈴木さんや私にお声をおかけくださいませ、拝見に参りたいと思います。全国でそんな取組がされて欲しいと願う、今ある意味では、文化オリンピックと言われているのはチャンスかと思っております。

ぜひ皆様の地域が文化的に豊かになるようにと願い、お子様たちにとってすばらしい豊かな環境が作り出されることを願って、今日のシンポジウムを閉じさせていただきます。

ありがとうございました。（拍手）